

## 多発性骨髄腫における染色体数と予後の関係

中川靖章、森 有紀、松田 功、植村直樹、鈴木憲史

日本赤十字社医療センター血液内科

【はじめに】多発性骨髄腫（MM）の経過は多様であり、染色体の核型異常がこのような多様性と関連することが知られている。多発性骨髄腫の予後不良因子として、13番染色体異常知られている。しかし、質的異常のみならず、数的異常も骨髄腫の病勢に影響すると思われ検討した。【方法】当院での1994年から2004年までの間の多発性骨髄腫134例を対象とし、染色体数48本以上の群（hyper群）23例と44本以下の群（hypo群）15例と47本から45本の群（regular群）96例で予後との関係を検討した。

【結果】regular群に比較して、hyper群では予後不良の傾向を認め、hypo群では有意に予後不良であった（ $P<0.05$ ）。hyper群では1番染色体異常9例（39.1%）に認め、うち1番染色体異常と13番の欠失を5例（21.7%）に認めた。hypo群では13番染色体の欠失を11例（73.3%）で認め、1番染色体異常と13番の欠失を8例（53.3%）に認めた。【まとめ】染色体の数的異常と予後の関係についてはhypo群>hyper群>regular群の順に予後不良であった。regular群では1番、13番染色体異常を殆ど認めなかったのに対し、hyper群では1番染色体異常を多く認め、hypo群では1番染色体異常と13番の欠失を8例（53.3%）に認め、染色体の数的異常との関連が示唆された。